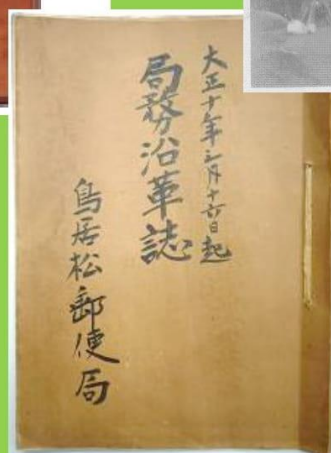


平成23年度民俗企画展

「春日井の電話の歴史」

～ 公社電話と有線放送電話の聞き取りを中心として～



春日井市教育委員会文化財課

はじめに

「電話」と聞いたら、みなさんは何を思い浮かべるでしょうか？ スマートフォン？ それとも黒電話？ あるいは、プッシュホン？ 小説や映画、ドラマや漫画などに頻繁に登場し、それぞれに時代をよく表すもの、と言ったら言い過ぎでしょうか。しかし、電話が、現代人にとって、なくてはならない身近な道具、機械の1つになっていることは実感されていることでしょう。では、「電話の歴史」、特に「春日井の電話の歴史」と言ったらどうでしょうか。

今年は、鳥居松郵便局で電話交換事業が始まって80年となります。しかし、鳥居松郵便局はもうありません。鳥居松郵便局は、現在の春日井郵便局と春日井電報電話局（現NTT）の前身です。ところが、鳥居松郵便局の調査は行われておらず、謎のままとなっていました。その理由は、手がかりが『春日井市史』と『東海の電信電話 ～90年のあゆみ』にのっている表、そして、春日井郵便局の『業務沿革史』のみだったからにはかありません。日本電信電話公社の民営化と事業整理により電話等に関する資料は散逸してしまっており、春日井郵便局は健在ですが、やはり民営化されていて、今回の調査で、『業務沿革史』には省略が多いことがわかりました。しかも、当時を知る方たちは高齢となっており、記録が急がれます。

そんななか、鳥居松郵便局の局長だった伊藤十治氏の長女であり、その当時、電話交換にも携わっていた伊藤か津子さん（以後、かづ子さん）からの聞き取り調査をすることができました。また、伊藤十治家のご厚意で、鳥居松郵便局の時代まで記録された『局務沿革誌』をはじめとする所蔵していた当時の貴重な資料を拝見する機会に恵まれ、さらに、NTT西日本名古屋支店と尾張中央農業協同組合高蔵寺支店の協力も得て、鳥居松郵便局以後の電話事業に携わっていた方たちからの聞き取り調査をすることもかないました。

そこで本年は、郵便局から始まり日本電信電話公社の民営化まであゆんだ電話（＝公社電話）と高蔵寺農業協同組合で運営されていた有線放送電話を取り上げ、実際に業務に携わってこられた方からの聞き取り調査をもとに、春日井の電話の歴史を紹介します。

平成24年2月1日

春日井市教育委員会文化財課

目次	
はじめに	i
目次	ii
例言	iii
序章 春日井の電信・電話の草創期	1
第一節 『春日井市史』を見てみよう	
第二節 春日井に引かれていた特別な電信	
第二章 春日井の電話 その1 春日井郵便局の歴史を追う	3
第一節 新資料の発見	
第二節 篠木郵便局時代	
第三節 鳥居松郵便局時代の歴史を新資料から掘り起こす	
第四節 旧春日井郵便局時代	
第五節 新鳥居松郵便局時代	
第六節 春日井郵便局の誕生	
第三章 春日井の電話 その2 春日井電報電話局の歴史を追う	11
第一節 春日井電報電話局の誕生	
第二節 春日井電報電話局 春見町局舎①	
第三節 春日井電報電話局 春見町局舎②	
第四節 春日井電報電話局 春日井ビル局舎	
第四章 春日井の有線放送電話	18
第一節 これは何だろう？	
第二節 農業協同組合の有線放送電話	
第三節 高蔵寺農業協同組合の有線放送電話の導入	
第四節 超大型台風の襲来、そのとき有線放送電話は？	
第五節 有線放送電話の自動化と公社との相互接続	
第六節 有線放送電話の廃止	
電話関連の歴史年表	28
参考文献・協力を頂いた方（敬称略）	30
おわりに	

例言

- 1 本書は、春日井市・春日井市教育委員会が主催する平成 23 年度民俗企画展「春日井の電話の歴史」の報告書である。
- 2 本展は、中央公民館北館 1 階民俗考古展示室（春日井市柏原町 1 丁目 97 番地 1）において、平成 24 年 2 月 18 日（火）から 3 月 18 日（日）までの会期で開催した。
- 3 「春日井の電話の歴史」の調査は、春日井市文化財課が実施した。
- 4 本展の企画および本書の執筆・編集、聞き取り調査は、文化財課課長補佐 富中昭智が担当した。
- 5 聞き取り調査は対面あるいは電話による会話形式とした。実施日・実施場所等は次のとおり。
 - ・稲垣光男 2011 年 1 月 13 日（稲垣家）
4 月 28 日（高蔵寺農協）
11 月 29 日（稲垣家）
12 月 15 日（文化財課）
 - ・土屋昭雄，長江登，神田武志
2011 年 6 月 23 日（中央公民館）
 - ・小原達良，水野桂一
2011 年 7 月 6 日（文化財課）
 - ・黒川ふさ江 2011 年 9 月 1 日（電話），
11 月 15 日（黒川家）
 - ・安藤和枝 2011 年 10 月 6 日（中央公民館），
10 月 12 日（文化財課）
12 月 14 日（文化財課）
 - ・伊藤か津`子 2011 年 11 月 3 日（伊藤十治書店）
11 月 6 日（伊藤十治書店）
11 月 13 日（伊藤十治書店）
11 月 19 日（電話）
11 月 22 日（伊藤十治書店）
 - ・長縄三吉 2011 年 12 月 6 日（長縄家）
 - ・伊藤稔 2011 年 11 月 19 日（伊藤家）
 - ・水野千恵子 2011 年 12 月 3 日（水野家）
- 5 原則として、引用文中の旧字体は新字体に、片仮名は平仮名に改めた。
- 6 原則として、名称は当時の名称とした。

第一章 我が国における電話草創期の概略

アメリカ人のベルが電話を発明したのが明治9年(1876)であり、日本への電話機の輸入は、早くもその翌年の明治10年(1877)です。そして、明治23年(1890)には、東京―横浜間で電話業務が開始されました。これが日本最初の電話の開通とされています。加入者東京155名、横浜42名の間で、交換台を通して話したい相手につないでもらうことができました。これを電話交換事務（単に交換事務とも）と言います。実は、それ以前にも警察電話や鉄道電話、監獄電話などが開設されていますが、これらは特定の組織内で通話できるようにした内線電話のことです。一般に、電話の開通というのは、公衆向けのものを指します。

また、当時、官営にするか民営にするかで議論されましたが、結局、官営と決まり、逓信省が管轄することになりました。逓信省は郵便と通信を扱う中央官庁であり、電話は郵便局が取り扱うことになりました。

第二章 春日井の電話 その1 春日井郵便局の歴史を追う

第一節 春日井の電話の草創期

『春日井市史』「市内郵便局一覧表」(p508)によると、春日井で一番早く電話を引いたのは勝川郵便局で、明治44年(1911)に始まっています。次に早かったのは坂下郵便局で、大正10年(1921)となっています。これは通話事務といます。郵便局で交換事務によって地域の加入者に電話をつなぐことができるようになったのは、坂下郵便局が大正11年(1922)、勝川郵便局が大正13年(1924)となっていますから、坂下郵便局の方が早かったことになります。そして、3番目が高蔵寺郵便局の昭和5年(1930)、4番目が篠木郵便局（後の春日井郵便局）の昭和7年(1932)となります。

コラム

電話とよく似たものに電信があります。電信とは電気を使用して符号（情報）のやりとりをする通信のことで、電報はその符号を文字にしたものです。電信は電話よりも早く、明治2年(1869)に東京―横浜間で始まったとされています。『春日井市史』「市内郵便局一覧表」(p508)によると、春日井で一番早く電信（電報）を引いたのは勝川郵便局で、明治30年(1897)に始まっています。次に早かったのは坂下郵便局で、明治44年となっています。電信は、どちらも電力が供給される前に始まっています。電信は「電池」で十分に機能を果たしたようです。

『春日井の近代史話』を見ると、明治天皇の御巡幸が春日井を通過した話が紹介されています。そのなかに、「沿道の電信柱植立もすみ、六月一二日に一時電信仮局の設置がすみ」とあるのです。執筆を担当した櫻井芳昭氏（春日井郷土史研究会）に教えて頂いたところ、根拠となっているのは、『愛知縣聖蹟誌 卷一』の「六月十二日、御巡幸驛々へ一時電信假局を設置すべきに就き、懸令は各郡に令して、之に要する家屋一戸を選定せしむ」という箇所とわかりました。これは、なんと明治 13 年のことです。天皇一行の安全を図るためのものであり、当時、軍事・治安の必要性から全国に構築した、明治政府の政策としての特別な電信網の一環だったのです。

『愛知縣聖蹟誌卷一』

ただ、ここには「一時」と書かれています。御巡幸の間だけだったととることができます。しかし、その後に電信の記録がないか確かめたところ、明治 15 年に東春日井郡長の堀尾茂助から郡内各戸長に出された通達である『御状留』に、「1 月 16 日 電信柱敷地民有地のこと」「7 月 4 日 下街道（瀬古～内津）筋電信に支障の枝葉伐採のこと」という趣旨の言葉があることが『春日井市史』に紹介されていることがわかりました。しかも、「その他教育・衛生・通信・郵便・交通などいわゆる文明開化の波がしだいに滲透していることもわかる」と解説しており、電信が御巡幸の後も使われていたことをうかがわせる内容となっています。

第二節 新資料の発見

春日井の電話は、後々すべて春日井電報電話局に併合されていきます。そこで、春日井電報電話局とその前身である春日井郵便局に焦点を当てて、改めて電話の歴史を追ってみたいと思います。

しかし、春日井郵便局の歴史について書かれた本はありません。また、春日井電報電話局の歴史について書かれた本もありません。そこで、『春日井市史』の「市内郵便局一覧表」（表 1）と同じく『春日井市史』の「春日井電報電話局設置の沿革」（表 2）、そして『東海の電信電話 ～90 年のあゆみ～』（以後『東海の電信電話』）の「春日井電報電話局」（表 3）を見比べてみましょう。

表 2 と表 3 は概ね一致しています。しかし、表 1 と表 3 を比べてみると、通話事務開始の年月日が異なっています。表 1 の では昭和 7 年(1932)11 月 6 日としているのに対し、表 3 の では昭和 6 年(1931)12 月 16 日としているのです。表 1 の他の郵便局を見てみると、通話事務の方が電話交換事務よりも早いことから、春日井郵便局も同じと考えると、表 3 の昭和 6 年(1931)12 月 16 日の方が正しいのではないかとと思われるのですが、これだけでははっきりしたことはいえません。

表1 市内郵便局一覧表

局名	所在地・種別	設置 年月日	電信事務 開始 年月日	電話交換 事務開始 年月日	通話事務 開始 年月日
春日井	瑞穂通	大正 10. 3. 16	昭和 10. 8. 1	昭和 7. 2. 6	昭和 7. 11. 6

『春日井市史』 p508 より

表2 春日井電報電話局設置の沿革

年月日	沿革
大正10. 3. 16	篠木郵便局設置（東春日井郡篠木村大字八幡字町割33）
昭和 7. 2. 6	電話交換業務を開始（交換方式、磁石式、単式）加入数32
10. 6. 1	局舎新築移転，鳥居松郵便局と改称（同村大字関田192の1）
18. 7. 1	普通局に昇格，春日井郵便局と改称
24. 6. 1	春日井電報電話局設置（春日井市鳥居松5丁目）

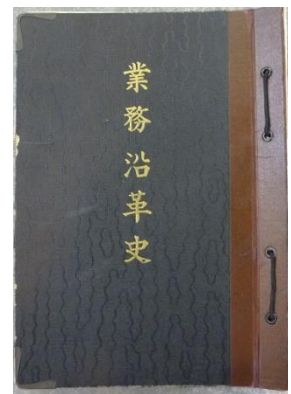
『春日井市史』 p509 より

表3 春日井電報電話局

昭和 6. 12. 16	篠木郵便局で通話事務開始（篠木村大字八幡）
7. 2. 6	電話交換業務開始（磁石式加入数32）
10. 6. 1	局舎移転（篠木村大字関田192の1） 鳥居松郵便局と改称
10. 8. 1	電信事務開始
18. 6. 1	町村合併市制施行 春日井市となる
18. 7. 1	春日井郵便局と改称
21. 12. 1	勝川局の電報配達区域を合併
24. 6. 1	二省分離，春日井電報電話局となる

『東海の電信電話』 p716 より

手がかりが他にないのであれば、これ以上は追究することは難しいと感じていたところ、現在の春日井郵便局に「沿革史」があることがわかりました。「沿革史」というのは、郵便局がそれぞれ保管しているいわば郵便局の歴史が代々記載されてきている台帳であり、それにのっていけば上の疑問は解決するはずです。そこで、特にお願いしたところ、その「沿革史」を見せて頂くことができました。春日井郵便局の場合、沿革史の正式名は『業務沿革史』です。ところが、残念なことに通話事務開始は記載されていませんでした。



春日井郵便局
『業務沿革史』

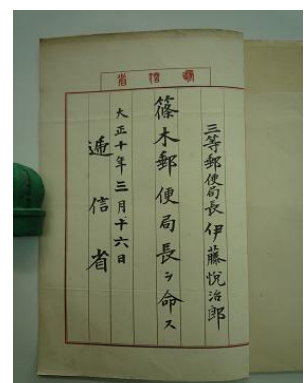
春日井電報電話局の「沿革史」はないとわかっていましたので、通話事務に関してはもうこれ以上調べる手段は絶たれたわけです。しかし、ちょうどそのとき、鳥居松郵便局の『局務沿革誌』と『辞令』等を伊藤十治家のご好意で拝見させて頂くことができたのです。

第三節 篠木郵便局時代（大正 10 年～昭和 4 年）

春日井電報電話局の前身である「篠木郵便局」は、大正 10 年(1921)3 月 16 日に開設されました。表 1・表 2 の $\boxed{\hspace{1cm}}$ で示したところです。ここでいう篠木郵便局の位置は東春日井郡篠木村大字八幡町割 33 地で、現在の伊藤十治書店の駐車場の位置となります。四九市通（かつての下街道）に面していました。『局務沿革誌』と『辞令』によると、初代局長は伊藤悦治郎氏となっていますが、この方は伊藤十治氏（二代目を襲名）のことです。『局務沿革誌』の局舎構造のところには「木造局長住宅一部改造 間口九尺奥行三間」とあります。つまり、伊藤家が特定郵便局として開設したのが篠木郵便局だったのです。この時の取扱事務は、郵便・為替・貯金・保険となっています。



鳥居松郵便局
『局務沿革誌』



辞令 伊藤悦治郎
（二代目伊藤十治）
篠木郵便局長ヲ命ス

ちなみに、伊藤家は、「江戸時代は米穀商であったが、明治には薬屋となり、やがて後東春日井郡一帯の教科書類の一手販売の権利を得、本屋を開業した」と『春日井市史地区誌編 2』に紹介されています。

第四節 鳥居松郵便局時代の歴史を掘り起こす

表2も表3も、篠木郵便局から鳥居松郵便局になったのは昭和10年(1935)6月1日であり、そのときに局舎を新築移転したとあります。しかも、上で確認したように、通話事務開始と電話交換業務は昭和6年～7年で、篠木郵便局時代とされています。

ところが、鳥居松郵便局『局務沿革誌』には、表4のようになっているのです。

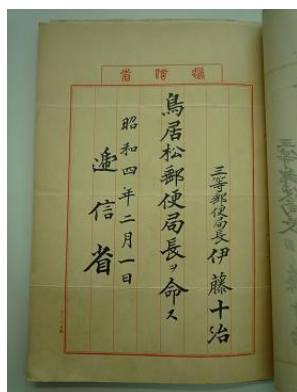
表4 鳥居松郵便局の沿革

(鳥居松郵便局『局務沿革誌』より富中が整理)

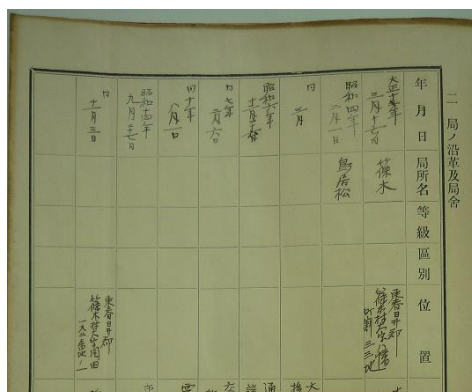
大正10年 3月16日	篠木郵便局設置(東春日井郡篠木村大字八幡町割33) 局長 伊藤悦治郎(二代目伊藤十治)
大正11年 11月17日	局長 伊藤十治
昭和 4年 2月 1日	鳥居松郵便局に改称
昭和 4年 3月	大典記念として局舎改築 間口2間奥行5間二階建て
昭和 6年12月 16日	電話通話事務開始
昭和 7年 2月 4日	特設電話交換事務開始
昭和 7年 2月 6日	交換事務開始 加入者32名
昭和10年 8月 1日	電話による電信事務開始 配達共
昭和14年 9月 27日	市外電話回線増設開通 名古屋―鳥居松―二回線となる
昭和14年11月 3日	改築移転 (東春日井郡篠木村大字関田192-1) 木造二階建
昭和18年 7月 1日	春日井郵便局に改称 普通局に改訂 伊藤十治 鳥居松駅前郵便局長に内定

これによれば、篠木郵便局から鳥居松郵便局になるのは昭和4年(1929)2月1日であり、通話事務開始も、電話交換事務開始も鳥居松郵便局時代になります。そして、関田192-1に移転した昭和14年(1939)11月3日の後も、局名は鳥居松郵便局のままです。

つまり、電話交換事務開始については、4つの資料すべてが一致しているのに、鳥居松郵便局への改称は『局務沿革誌』のみが昭和4年としており、通話事務開始は『局務沿革誌』と『東海の電信電話』のみが、そして、関田192-1への移転は『局務沿革誌』と『業務沿革史』のみが一致しています。今となっては原因がはっきりしませんが、この鳥居松郵便局の『局務沿革誌』が世に出ていなかったか、忘れ去られていた可能性が大きいと考えられます。



辞令 伊藤十治
鳥居松郵便局長ヲ命ス



鳥居松郵便局『局務沿革誌』
「局の沿革及局舎」のページ



伊藤十治氏

第五節 旧鳥居松郵便局時代（昭和4年～昭和14年）

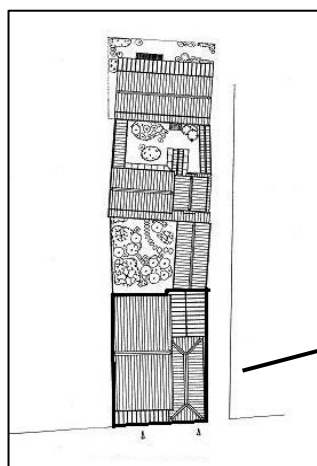
この『局務沿革誌』によれば、鳥居松郵便局は2つあったことになります。便宜的に、旧い方を旧鳥居松郵便局、移転した方を新鳥居松郵便局と呼ぶこととします。旧鳥居松郵便局は、昭和4年(1929)2月1日に篠木郵便局から改称のみ行われました。局舎も位置も同じです。ということは、この時代の旧鳥居松郵便局はこれまで知られていた歴史には存在していなかったことになります。正に幻の郵便局の時代と言えるでしょう。ただ、3月に「大典記念として局舎改築」しており、このときの局舎の写真と平面図、伊藤家の配置図が『春日井市史 地区誌編 2』にのっています。このころの様子を、伊藤十治氏の長女か津子さん（以後かづ子さん）にお聞きすることができました。

この建物は全体に洋風のおしゃれな形で、本屋と郵便局の屋根は別々になっていたのですが建物の中は壁で仕切られていました。向かって左側が本屋で、右側が郵便局でした。郵便局は入ってすぐのところにカウンターがあって、その左手前に公衆電話が設置されていました。確か四角い電話ボックスでした。カウンターの中は事務室で、その奥に電話交換室がありました。交換手は私より少し年上の女性の方でした。その方は日中の勤務で、夜になると帰ります。すると、夜の交換手が必要です。当時の交換手は女性の花型職業でしたが、夜に女性を勤務させるには抵抗のあった時代だったので、父（局長の伊藤十治氏）が自分の娘ということで私に夜の交換をやってくれないかと話をしたんです。私は迷いながらもその仕事を引き受け、夜になると足に車輪をつけたベッドを交換台の前に移動させてそこで寝て、交換台が鳴ると起きて交換業務をこなしました。

当時の交換手の服装は着物と袴で、マイクはぶら下がっていたのを使用していました。交換台の正面に40番までの番号がついていて、かかってくるとフタがあいて数字が見えるので、交換台の台上にある赤いコードと白いコードをそれぞれ受け手と相手に差し込みます。これを手動式交換台と言います。回線は40番まであるのですが、加入者は32人だったので電話番号は1番～32番になっていました。番号についてはお金を出すと希望する番号にできた時代でした。伊藤家の電話番号は伊藤十治氏にちなんで10番にしてありました。現在の電話番号81-2510の最後の10は、この10なんですよ。

当時使われていた電話機は木製で、正面にベルと話し口があり、左側に聞くための耳あてがついていたということですので、「デルビル磁石式壁掛電話機」か、あるいは、それに似た電話機と推測されます。

付け加えると、電報は電話で受け、例えば、向こうの人が「イロハのイ」とか、「トマトのトに濁点」と言うので、それを原稿用紙に書き留め、反復して確認し、配達の人に電話をかけて呼び、それを渡して配達してもらうというシステムだったということでした。



伊藤十治家平面図

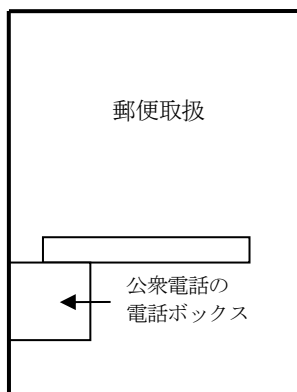


店舗部分平面図

カウンター

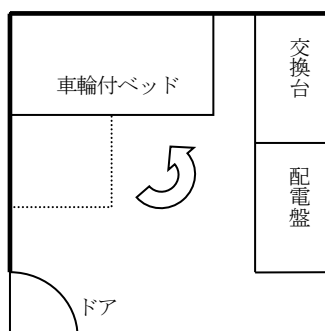


旧鳥居松郵便局局舎



郵便局内の配置

局内に入るとカウンターがあり、その前、向かって左側のところに公衆電話の四角い電話ボックスがあった。通話事務というのは、これが設置されて行われた。



電話交換室

電話交換室は郵便局の奥にあった。伊藤かづ子さんは、夜になるとベッドを交換台に寄せ、頭を向けて寝た。交換台が鳴るとすぐに起きて交換業務をこなしたという。



デルビル磁石式壁掛電話機

右側についているハンドルを回すと発電し、局（交換台）を呼び出すことができた。この方式の電話機を「磁石式電話機」という。デルビル磁石式壁掛電話機は、明治29年以降使用されるようになり、地方局では昭和40年ごろまで使用されたとNTTのHPで紹介している。卓上型もあり、甲号・乙号の二種類があった。

第六節 新鳥居松郵便局時代（昭和 14 年～昭和 18 年）

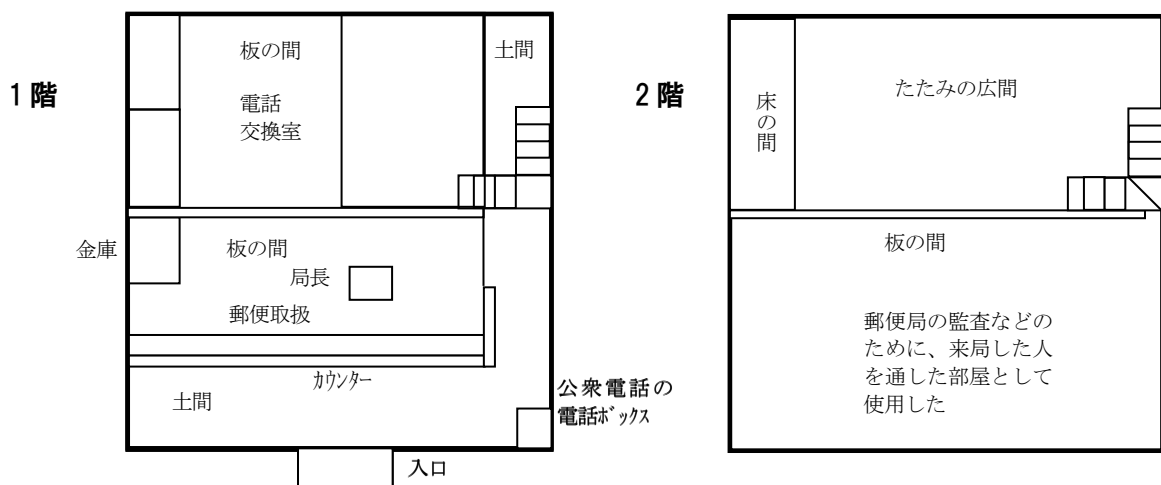
篠木郵便局、旧鳥居松郵便局があった町割 33 から移転し、昭和 14 年(1939)11 月 3 日に新鳥居松郵便局がスタートしています。位置は、東春日井郡篠木村大字関田 192-1 で、旧局舎から南に 50m ほどのところです。局舎は木造二階建で、昭和 11 年に売りに出されていた中津川銀行大井支店を土地ごと購入し、建物を移築したものでした。

このときのことをかづ子さんは、

私はこの時、父親（伊藤十治氏）と一緒に中津川まで見に行ったんです。父は、この春日井の地域が発展することを見込んで、郵便局も大きくする必要があると考えていたんです。私が三人姉妹の長女だったものですから、伊藤家の家業を継ぐと期待してのことだったと思います。そのときに六軒屋の大工を連れて行って、長い期間寝泊りして時間をかけて建物を解体して、馬車で運搬しました。そのとき、内津峠を越えるのが大変でしたね。それから、釘 1 本まで解体してもってきて、曲がった釘も丁寧に直して使いましたよ。私も釘を真っ直ぐにした覚えがあります。基礎は御影石で、建物は木造としっくいからできていました。蔵（これは今もあります）と庭園の庭石・灯籠も持ってきました。

と、大変懐かしそうに話してくださいました。

この時代の鳥居松郵便局の配置は次のとおりです。交換台は、旧鳥居松郵便局とほぼ同じものだったと記憶しているので、ひょっとすると使用していたものを移設しているかもしれないとのことでした。この時期は、人口増加が激しく、事務などの増加が著しかったことを覚えているそうです。



新鳥居松郵便局内の配置

局内に入るとカウンターがあり、向かって右側の端の角に公衆電話の四角い電話ボックスがあった。手前が郵便取扱をする部屋で、土間を通って奥に入ると6畳間があり、その奥に電話交換室があった。旧鳥居松郵便局から移ったときはとても広く感じたとか。電報業務をしていた場所は記憶がはっきりしないとのことだった。

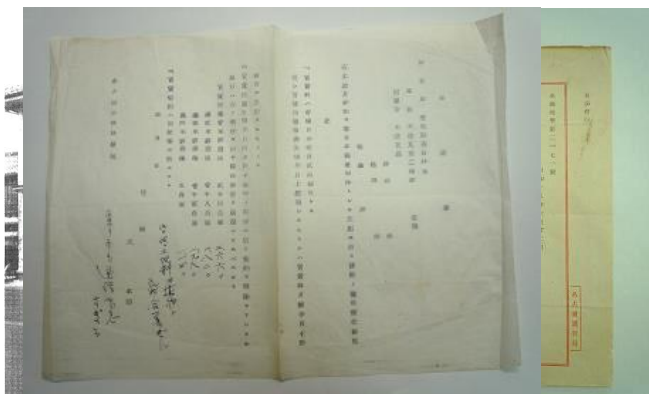
ただ、

このころにかづ子さんは結婚して、昭和 17 年(1942)から終戦までご主人の勤務の関係で春日井を離れたため、その間の業務や出来事については詳しいことは残念ながらわからないということでした。鳥居松郵便局の『局務沿革誌』を見てみると、電話に関係がありそうなのは、昭和 15 年(1940)に、名古屋－鳥居松市外回線一回線増設というのが見えます。

それから、この時期に重要なこととして、昭和 18 年(1943)6 月 22 日付で名古屋通信局総務課長から「貴局は 6 月 30 日限り普通局に改定に伴ひ貴官は新設鳥居松駅（現 JR 春日井駅）前郵便局長に内定」「尚右開局迄貴官身分は別紙の通り休職を命せられたるに付了知相成度」という内容の文書が来ていることがあげられます。そして、日付のない用紙だけの『承諾書』が添えられていて、そこには「右土地及び建物を春日井郵便局用として左記に依り貸與の儀承諾仕候也」「名古屋通信局長宛」とあります。

つまり、鳥居松郵便局は、特定郵便局から普通郵便局（伊藤家の経営から離れ、通信省の直営）になり、局長の伊藤十治氏は他の郵便局の局長になることに内定しましたが、その郵便局が開局するまでは休職を命じるということであり、鳥居松郵便局の土地と建物は名古屋通信局に貸し出されることになったのです。後継の普通局になった郵便局の名前は「春日井郵便局」ということがわかります。春日井市の市制施行がこの年の 6 月 1 日であり、できたばかりの「春日井」の名前を冠しているわけです。

このことに関してかづ子さんが次のようなエピソードを教えてくださいました。父親の伊藤十治氏がかづ子さんの夫（後に三代目伊藤十治氏を襲名）に「郵便局長と本屋の経営者とどちらがよいか」と聞いたそうです。すると彼は、「教科書販売を通じて私は学校の先生に知り合いが多く、先生たちと話をするのが好きなので本屋の経営をとりたい」と答え、本屋の経営を選んだということでした。



第七節 春日井郵便局の誕生

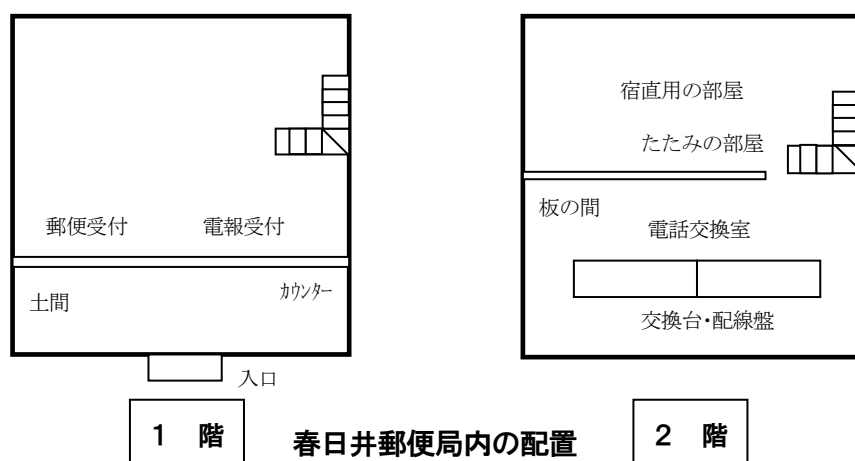
鳥居松郵便局の『局務沿革誌』などの資料は、昭和 18 年(1943)6 月 30 日をもって終了しています。そこで、ここから

は新鳥居松郵便局局舎業務沿革誌と『東海電信電話』として『春日井市史』を元比
であり、春日井郵便局から鳥居松郵便局長宛に土地と建物を春日井
郵便局用として貸与を承諾する文書。
べが整理していくこの果敢を命ずる文書

昭和 18 年(1943)7 月 1 日に、春日井郵便局がスタートしています。位置は、もちろん、新鳥居松郵便局と同じ関田 192-1 です。この時は春日井市になっているので当時の表記の仕方はわかりませんが、現在の八事町 1 丁目 192-1 です。このときの様子は、当時、交換手だった黒川ふさ江さんにお聞きすることができました。この方は、終戦直前の昭和 20 年(1945)4 月にこの春日井郵便局に就職しています。

建物の 1 階は、真ん中の入口から入るとすぐカウンターがあって、向かって左側が郵便受付で、右側が電報受付でした。カウンターの中の右側の隅が階段で、2 階に上がるとそこに電話交換室と宿直用の部屋がありました。電話交換室は部屋の真ん中に交換台と配電盤があり、道路と反対側には宿直用のたたみの部屋がありました。交換台の台数については記憶がはっきりしませんが、加入者は 40～50 人だったので、1 台か 2 台だったと思います。勤務は朝～朝であり、休みもその朝～朝という形でした。2～3 歳ぐらい年上の人 2 人と一緒に勤務をこなし、その後、毎年 1～2 人採用されて入ってきましたね。

この時代の春日井郵便局の配置は次のとおりです。細かい部分はよくわからない部分もありますが、電話交換室は 1 階から 2 階へ移動していることがわかります。



局内に入るとカウンターがあるのは同じだが、向かって左側が郵便取扱をする部署で、右側が電報を扱う部署だった。右の奥に階段があり、そこをのぼると宿直のための部屋で、その前が電話交換室だった。

第三章 春日井の電話 その2 春日井電報電話局の歴史を追う

第一節 春日井電報電話局の誕生

昭和 24 年(1949)6 月 1 日、それまで郵便局を管轄してきた通信省が廃止され、電気通信省と郵政省に分離されて、各施設や財産なども分割されることになりました。電話は電気通信省の管轄でした。これを一般に二省分離と言います。

これに合わせて、春日井市にも昭和 24 年 6 月 1 日に春日井電報電話局が誕生しました。しかし、局舎はそのまま春日井郵便局と同居するという「共用局舎」でした。位置は新鳥居松郵便局・春日井郵便局と同じで、やはり現在の八事町 1 丁目 192-1 です。ただ、春日井郵便局の『業務沿革史』によると、春日井郵便局は昭和 24 年 10 月 31 日に春日井市和爾良 5774 の 8（現在の春日井王子郵便局の前身か？）へ移転していきますので、春日井電報電話局のみの局舎になるわけです。しかし、今度は電気通信省が廃止され、昭和 27 年(1952)8 月 1 日に日本電信電話公社が発足し、その後、春日井電報電話局も局舎を新築して移転することになります。ということは、この局舎の春日井電報電話局の時代はわずか 3 年ほどになります。正に過渡期だったということが出来るでしょう。そのため、この時代の業務は、基本的には第一章第七節の春日井郵便局の時代とそれほど大きくは変わらないのではないかと推測されます。

第二節 春日井電報電話局 春見町局舎①

新しい局舎の位置は春見町 2 番地で、現在のヤマダ電機の向かい側辺り、ちょうど柿安という店のある辺りでした。昭和 27 年 12 月 24 日に移転しています。このとき

の様子は、当時、交換手だった安藤和枝さんにお聞きすることができました。この方は、昭和 30 年(1955)4 月にこの春日井電報電話局に就職しています。

当時、清水屋はまだなく（現在のヤマダ電機の建物は清水屋の建物でした）、田圃の中にあるという感じでした。局舎は木造 2 階建てで、壁はうすいピンク色でしたね。2 階が電話交換、1 階が電報の部屋になっていて、交換台（市内台）は 6 台、12 席ありました。その他に、市外台、記録台、案内台などもありました。

電話は磁石式で、かかってくると振動して表示器のキャップが落ちて番号がわかる（請求者）のでその穴と、希望する相手（対話者）の番号の穴にプラグのついたコードでつなぐというものでした。市外通話は小牧・高蔵寺・名古屋が多かったですね。その場合は、

対話者の電話番号を聞いてから、一旦回線を切り、相手局へ依頼して対話者につなぎ、請求者につなぎ直すという方法をとりました。直接つなげられない北海道のような遠いところへは、回線の空いているところに頼まなければならない、複数の回線をもっていた小牧などを中継局にしてつないでいったので大変でした。それから、交換証という紙に、受付時刻、請求者の番号、対話者の番号、担当した自分の番号、通話開始時刻～終了時刻を記入し、料金の請求等に使用しました。

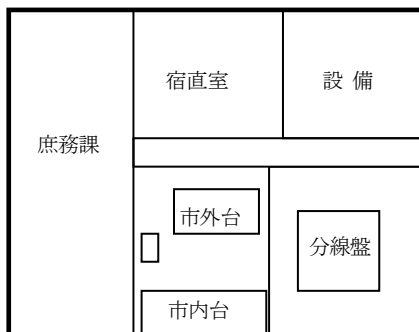
市外の場合は、みなさん、電話番号を言うのですが、市内の場合は店の名前や屋号をいうことが多かったのも、それも覚えなければなりませんでしたね。初めて交換の業務をしたときは、それはそれはドキドキしましたよ。

交換台ではマイクとレシーバーで応答するのですが、このころはヘッドホン型（ブレストといったそうです）のものを使用していました。電話機はやはりハンドルを回す磁石式で、この時代になると黒くて四角かったということでした。確認したところ、これは 3 号磁石式卓上電話機とわかりました。



3号磁石式卓上電話機

右側についているハンドルを回すと発電し、局（交換台）を呼び出すのはデルビル磁石式壁掛電話機と同じ。受話器の置く位置を変えると、壁掛電話にもすることができたという。



春日井電報電話局内の2階の配置

電報電話局に向かって右の方に通用門があり、そこから入って局に向かって右側から2階に上がったとのこと。電話交換室には交換台として市内台と市外台が背中合わせになるように置かれていた。

就職したばかりの最初は試用期間であり、1年の臨時雇用の後、さらに2か月の訓練を施されたそうです。声の出し方や反復して正確に伝える術などは、徹底して教え込まれたそうです。交換手はこの時代もやはり女性が多く、この方が採用された後ぐらいいから男性も徐々に入ってきたようです。電話の加入希望者が多く、職員をどんどん増やしていた時期でした。『東海の電信電話』によると、昭和30年8月28日に勝川局の電話番号交換業務を併合し、交換台の市内台9台、市外台8台、加入者が720人（『春日井市史』）となり、安藤さんの記憶でも、職員が大幅に増えて業務が楽になった覚えがあるということでした。

勤務は、8:00～16:00、8:30～16:30、9:00～17:00、10:00～18:00、14:00～20:00、16:30～8:30、宿明け、週休を8日で1周するようにした8輪番制で、20人程度の職員でこなしたとのこと。16:30～8:30は宿直のことで、深夜に3時間ほど仮眠ができるようになっていました。そのため、夜中は1人になることもあって、そのときは2:00～4:30ごろは不安だったとか。例えば火事があると、交換室に何本もかかってきて火事はどこかと聞いてきたのだそうです。



交換台電報電話局前の看板
春見町局舎



玄関前職員全員の記念写真
会議所の方を見た風景

交換手の仲間との一時

第三節 春日井電報電話局 春見町局舎②

この春見町局舎の時代に重大な変革がありました。昭和 34 年(1959)5 月 28 日に電話交換が自動式に切り替えられたのです。これまで紹介してきたように、春日井ではここまで磁石式電話であり、手動式交換台で電話交換業務をおこなってきました。しかし、他都市では、共電式電話機というものが使えたところがありました。これは、電源が局内にあり、磁石式のようにハンドルを回さなくても受話器を持ち上げるだけで局（交換台）につながったのです。春日井では、この共電式は採用されず、直接自動化されたわけです。ただ、これは地方都市ではそれほど珍しいことだったわけではないようです。

自動化というのは、電話機にダイヤルがつき、受話器をもちあげてダイヤルを回せば、相手に直接電話をかけることができるようになったということです。この時に使われた電話機は 4 号自動式卓上電話機で **自動交換機 A 型**



あり、その後、いわゆる「黒電話」として有名な電話機である 600 形自動式卓上電話機が登場してきます。そして、この自動化を可能にした自動交換機を A 型（ステップ・バイ・ステップ交換機）といい、ダイヤルの番号に応じて回線に次々に接続していった、最後に相手の電話機に回線をつなげるという仕組みになっていました。つまり、交換手はもう必要なくなってしまったのです。そのため多くの職員が、名古屋の市外通話などまだ交換業務が必要だった部署や番号案内の部署などに配置換えされて転勤して

いったということです。

この自動化への切り替えの時、加入者数は 1,981 になっていました。そして、昭和 39 年(1964)に東京への自動即時化、昭和 40 年(1965)に大阪に自動即時化され、この年の 11 月に春日井市内局番 81 がつけられて全国の自動即時網に編入されました(『春日井市史現代編』)。



左：4 号自動式卓上電話機

昭和 25 年性能・デザインで世界水準のものとして誕生。

右：600 形自動式卓上電話機

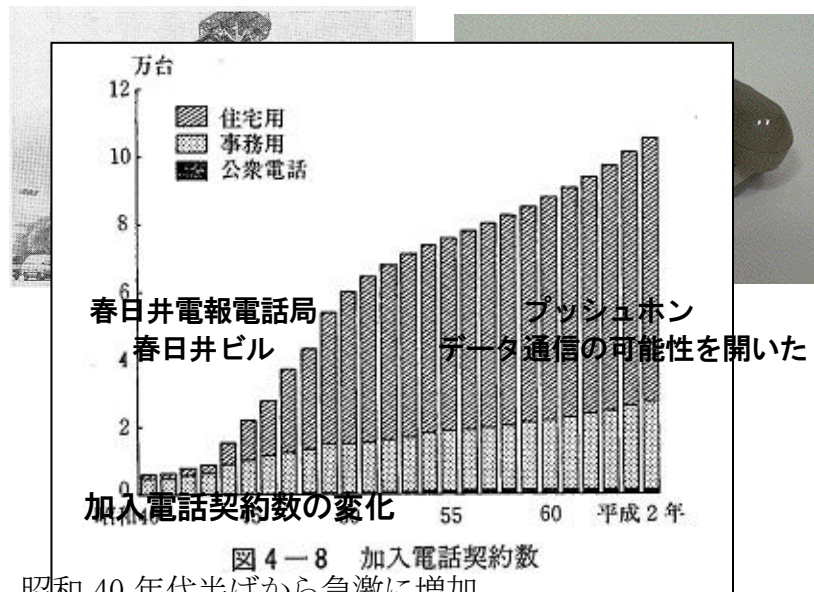
昭和 38 年から導入が図られ、昭和 46 年から初ト・グレイ・グリーンの 3 色も登場した。

第四節 春日井電報電話局 春日井ビル局舎

電話の普及期にあたるこの時期、業務拡大のためにさらに新しい局舎が新築され、昭和 43 年(1968)に移転しました。それが、現在の N T T 春日井ビルです。位置は、鳥居松町 5 丁目 48 番地で、春日井市役所東交差点と市役所の間になります。

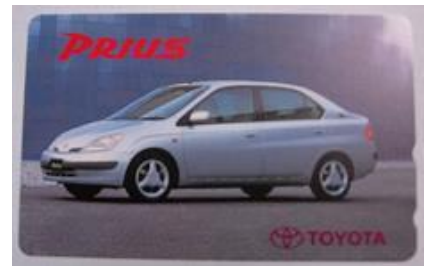
移転した昭和 43 年には加入者数が 8,000 を突破し、わずか 10 年後の昭和 53 年(1978)には 70,000、平成 2 年(1990)には 100,000 を突破しています。加入者の傾向を調べてみると、昭和 45 年(1970)に住宅用契約が事務用契約を始めて上回り、昭和 50 年(1975)には住宅用が事務用の 3 倍にまで増えています。このころまでは、電話は住宅用というよりは事務用であり、官庁をはじめ銀行や商店などのためという意識がありました。ところが、この普及期ぐらいから電話はごく普通の家庭に入り込み、身近な存在になっていったのです。それは、春日井局管内からの対地別電話発信量の調査にも表れています。簡単に言えば、電話を春日井市からどこへかけているかを調査したものです。東海 4 県下に限ってみてみると、春日井市→春日井市（つまり市内への電話）は、昭和 47 年(1972)に 25.0%だったのが、平成 2 年(1990)には 70.54%になっており、電話が遠くにかける特別なものではなく、日ごろ親しくしている人にかける身近なものというイメージが浮かび上がってくるのです。

こうして電話の普及に貢献してきた日本電信電話公社（電報電話局）もその役割を終え、昭和 60 年(1985)4 月 1 日に民営化されて日本電信電話株式会社（N T T）が誕生したのです。



昭和 40 年代半ばから急激に増加していることがわかる。昭和 45 年に住宅用が事務用を初めて上回り、昭和 50 年には住宅用が事務用の 3 倍に達している。

『春日井市史 現代編』より



携帯電話の普及でテレホンカードを使うことも少なくなった

表 4-63 春日井電話局管内から東海 4 県下への対地別年間電話発信回数 (平成 2 年)					
対 地 先	発信回数	同 比 率	対 地 先	発信回数	同 比 率
	千回	%		千回	%
名古屋	77,695	29.98	津	340	0.13
津 島	1,406	0.54	四日市	859	0.33
瀬 戸	3,573	1.38	桑 名	479	0.18
春日井	183,114	70.54	亀 山	54	0.02
尾張横須賀	1,093	0.42	上 野	82	0.03
一 宮	14,062	5.42	松 阪	244	0.09
半 田	791	0.30	三瀬谷	16	0.01
刈 谷	1,487	0.57	尾 鷲	81	0.03
西 尾	195	0.08	熊 野	32	0.01
岡 崎	1,052	0.41	伊 勢	183	0.07
豊 田	1,313	0.51	鳥 羽	45	0.02
豊 橋	824	0.32	阿 尾	55	0.02
田 原	54	0.02	静 岡	880	0.15
新 城	55	0.02	清 水	98	0.04
設 楽	37	0.01	島 田	28	0.01
多治見	2,293	0.88	榛 原	32	0.01
恵 那	414	0.16	沼 津	142	0.05
中津川	434	0.17	富 士	171	0.07
岐 阜	5,645	2.17	富士宮	33	0.01
高 富	96	0.04	御殿場	20	0.01
大 垣	1,076	0.41	伊 東	35	0.01
掛 斐川	100	0.04	修善寺大仁	13	0.01
関	621	0.24	下 田	12	0.01
郡上八幡	235	0.09	浜 松	499	0.19
美濃加茂	3,074	1.18	磐 田	167	0.06
美濃白川	91	0.04	天 竜	24	0.01
高 山	250	0.10	掛 川	57	0.02
荘 川	11	0.00	合 計	259,592	100.0
下 呂	225	0.09			
神 岡	65	0.03			

NTT 春日井支店

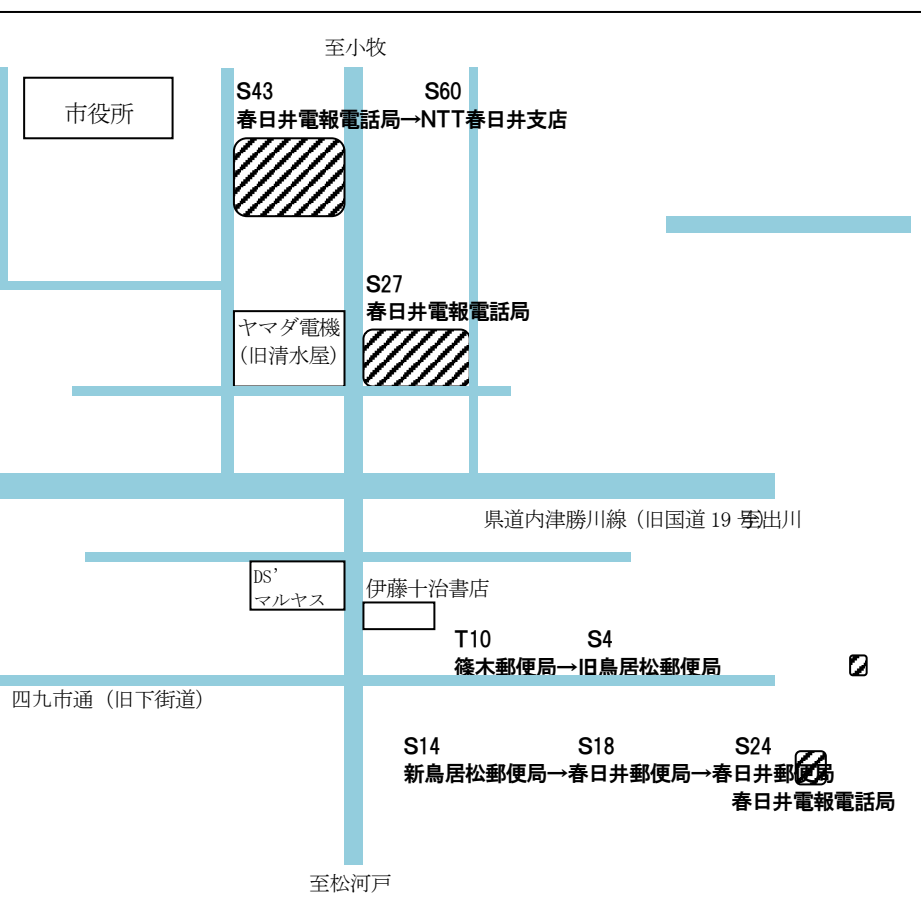
注 対地先は単位料金区域

春日井管内からの 対地別発信量・回数

春日井→春日井は、昭和 47 年には 25.0%だが平成 2 年には 70.54%になっている。日ごろ親しくしている人にかける身近なものとなっていることがわかる。

『春日井市史

資料編 5』より



篠木郵便局～NTT春日井支店の位置の変遷

第四章 春日井の有線放送電話

第一節 これは何だろう？

右の写真は、春日井市文化財課に寄贈され、収蔵庫に保管されていた機械です。大きめの四角いスピーカーに電話と同じ受話器がついており、何か不思議な形をしています。気になって、手にとってよく見てみると、「有線放送用秘話個別併用装置 沖電気工業株式会社」と書いてあるラベルが貼ってあります。「有線放送



文化財課にあった機械

用とは何だろう？」「秘話個別併用装置って何？」と疑問は出てきたのですが、見たこともないその機械にはそれ以上手がかりがなく、すぐに棚に戻してしまいました。

その後、『春日井市史』を読んでいたときに、あるページに目がとまりました。そこには「農協有線放送」という言葉と写真がのっていたのです。それまで私は、有線放送というのはラジオなどのようにD Jあるいはアナウンサーが音楽を流しているところで、契約したところに有線で直接配信しているものといった漠然とした認識でした。写真も、ヘッドホンをつけた女性が何か台の前で作業をしているといったもので、そのときは別に疑問にも思わなかったのですが、そのページには、「電々公社の電話と同じ性能を備えた秘話個別式呼び出し」と書いてあったのです。言われてみれば、その写真に写っている女性の数がアナウンサーにしては多すぎますし、交換台のようにも見えます。その電話機の写真はなかったのですが、「あの倉庫にあった機械は、この電話機だったのではないか？」と思い、文化財課の台帳をすぐに調べてみました。すると、そこに「受話器 ○○氏寄贈 1993.4.14 廻間町 連絡先□□□□」と出ていたのです。受話器とは、恐らく電話機のことだろうと推測ができるわけです。

残念ながら、寄贈していただいたご本人には連絡がとれず、確認がとれませんでした。その後の調べで、この不思議な機械は春坂農業協同組合（かつての坂下地区の農業協同組合）の有線放送で使われた電話機であることがわかったのです。

第二節 農業協同組合の有線放送電話

もう一度、『春日井市史』を見てみましょう。すると、509 ページに「これは単に組合放送ばかりでなく、地域全体への連絡、あるいは家と家との連絡などに役立っている。」とあり、510 ページに次のような一覧表がのせてあります。

表5 農協有線放送一覽

組 合 名	開始年月日	台 数	区 域	利 用 状 況	備 考
高蔵寺 農業協同組合	昭和 34. 5. 1	1,100	旧 高蔵寺町	開始当時一日平均 2,000 通話, 現在 1,500通話,公共団 体等からのお知らせ 一日平均約10～ 20通話	高蔵寺・春坂両 農協間の連絡も できて便利であ る。
春坂 農業協同組合	昭和 36. 1. 1	809	旧 坂下町	一日平均 約1,800通話	
春日井 農業協同組合	昭和 37.11.10	申込み数 4,000 収容能力 5,000	旧 春日井 市内	電々公社の電話と 同じ性能を備えた 秘話個別式呼び出 しになっており, その利用価値は大 であると期待され ている。	工費約1億3千 万円, 1台500回 線の交換台が10 台

『春日井市史』p510 より

開始が昭和 34 年(1959)～昭和 37 年(1962)になっていますので、春日井電報電話局
で言えば、ちょうど春見町局舎の自動化が行われた時期とだいたい重なります。ちな
みに、春日井市に高蔵寺町と坂下町が合併したのが昭和 33 年(1958)1 月 1 日です。表
の中に「旧高蔵寺町」「旧坂下町」「旧春日井市内」とあるのはこのためです。

春日井電報電話局における昭和 34 年(1959)の加入者が 1,981 人（『春日井市史 現
代編』）ですので、それぞれの農業協同組合の規模がかなり大きいことがわかります。
しかも、高蔵寺農協と春坂農協は連絡できるとあるので、これを合わせると春日井電
報電話局の加入者数に匹敵する数となります。そして、旧春日井市内では春日井電報
電話局の加入者の 2 倍にあたる 4,000 が申込み数とあります。これでは春日井電報電
話局にとっては影響がないわけがありません。なぜ、この時期にこの規模で農協運営
の電話が始まり、そもそも、どんな利点があったのでしょうか？そして、現在はどう
なっているのでしょうか？

高蔵寺農協、春坂農協（坂下地区）、春日井農協は、現在、尾張中央農業協同組合（J
A尾張中央、本店は小牧市）に統合され、それぞれ支店となっています。有線放送電
話について調べるためにそれぞれの支店に問い合わせてみたところ、記録等を残して

いるところは高蔵寺農協だけとわかり、しかも、この有線放送電話に携わった方として稲垣光男さんを紹介してくださいました。そこで、この有線放送電話については、高蔵寺農協の歴史を追うことで春日井の有線放送電話の歴史を俯瞰することができればと思います。

面白いことに、この電話には何とも意外な歴史があったのです。

第三節 高蔵寺農業協同組合の有線放送電話の導入

有線放送電話は、戦前に始まった放送協会の共同聴取有線設備に、非常用の連絡にも使用可能とするため、放送と通話ができるように改良を施したものです。昭和 26 年(1951)、千葉県旧君津郡松丘村（現在の君津市）の消防団長四宮喜八郎氏が同村の通信技師の中津一氏に改良を依頼し、同村に設置したのが始まりとされています。

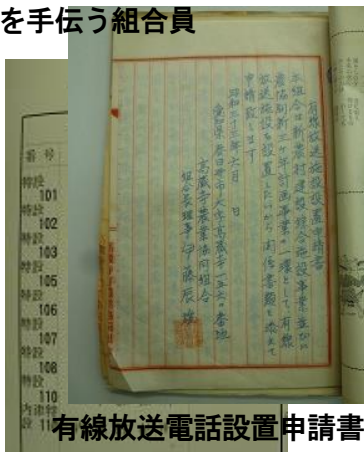
昭和 31 年に農林省が農村の通信手段の改善に補助金を出すことが決まると、高蔵寺農協はすぐに設置の検討・計画に入ります（「有線放送電話に関する法律」：郵政大臣許可制で昭和 32 年制定）。昭和 33 年(1958)10 月には郵政省東海電波監理局へ「有線放送電話業務許可申請書」を提出すると、昭和 34 年(1959)3 月 13 日付で許可され、4 月には早くも設置が完了。5 月 1 日から運営が開始されています。

交換機は手動交換機で、共電式でした。電話機と共に沖電気製を採用しています。交換業務は、女子アナウンサー（6 名）が担当しました。加入数は 1,100 ですが、それを 60 回線で通話できるようにしています。つまり、各回線は春日井電報電話局のように個人専用ではなく、複数加入者の共同利用だったのです。しかも、交換からの呼び出しも会話の内容も電話機についているスピーカーから聞こえてくるという方式ですので、同じ回線を利用していた近所の人に話の内容が聞こえていました。それから、もともとは有線放送用の設備として許可されているわけですので、農協の組合員向けの組合放送（自主放送）と NHK ラジオの再放送の時間があらかじめ決まっており、それ以外の時間しか電話は使うことができないという制約もありました。もし、放送をしているときに電話を使えば、他の家庭までが放送を聴けなくなりました。そのため、放送の冒頭では、「緊急時以外の通話をご遠慮ください」とアナウンスしていたようです。

しかし、それまで大変高価で、贅沢品とみられていた電話が、これらの制約があるとはいえ比較的安価な料金で引けるということ、農協からタイムリーな情報が流されるということから、当時の組合員の理解を得て多くの加入者を獲得したようです。

しかも、昭和 36 年(1961)10 月 1 日からは、春坂農協（旧坂下町）との接続ができるようになり、利便性が大きく向上しました。

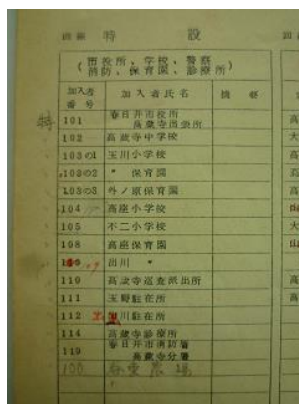
線架設工を手伝う組合員



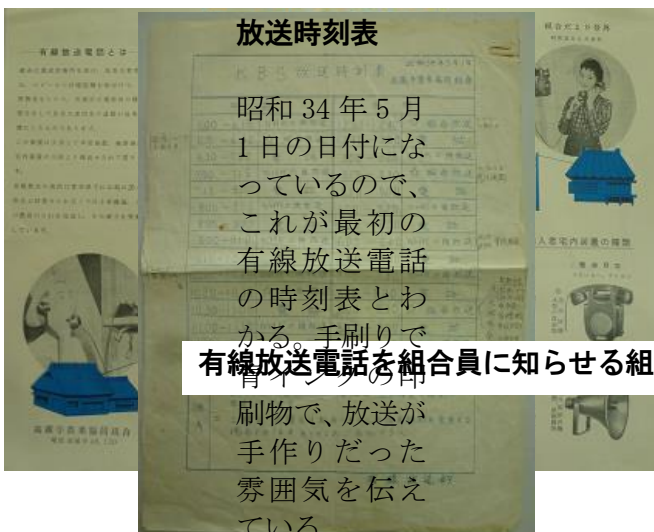
有線放送電話設置申請書



有線放送電話業務許可書



有線放送加入者番号簿 第 1 版 春坂農協の有線放送
電話番号接続用きりたにながわがより 3 ケ
タまでの番号。



有線放送電話を組合員に知らせる組合だより

このころの様子を、水野千恵子さんにお聞きす
ることができました。携わった仕事は、アナウンサー兼交換手で
す。高蔵寺農協の有線放送電話では、アナウンサーは交換手もこなしたのです。この
方は開局当時の昭和 34 年(1959)4 月に高蔵寺農協に就職しています。

建物は木造 2 階建てで、階段を上がって 2 階の左側に有線放送電話のための部屋があっ
て、手前が録音室、奥に交換台と放送台のある部屋がありました。廊下をはさんで反対

何といっても有線放送電話は地域と密着していたことから、放送中に話し方や漢字の読み（特に地名など）、アクセントが間違っているとすぐに伝わって耳に入ってきたとか。そのため仕事に対する厳しさはかなりのものだったようです。職員みんなで励まし合って乗り越えたことと、厳しかったことがとても良い経験となっていて今は感謝しているということを、いかにも楽しそうに話してくださいました。



高蔵寺農協の有線放送電話機（沖電気製）

冒頭で紹介した春坂農協の電話機と同じものだが、このときの高蔵寺農協の電話機には秘話個別併用装置はついていなかった。そのため、回線の末端でつながっている家には話している内容が聞こえていた。右下の緑色のつまみはスピーカーの音量を調整するもので、聞く必要のない時は聞こえないようにすることもできた。



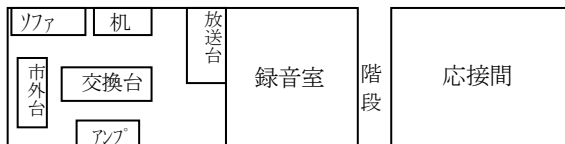
高蔵寺農協では、アナウンサーは交換手を兼ねていたの、仕事が多く大変だった。



放送会館の2階の配置

階段を上って、2階の左側に有線放送電話のための部屋と設備が整えられていた。職員は、アナウンサーと交換手を兼ねていたの、部屋の中に交換台だけでなく、放送台がある。また、番組を作るための録音室と仮眠をとるための休養室もあった。

皆建



第四節 超大型台風の襲来、そのとき有線放送電話は？

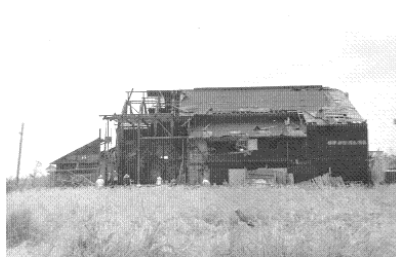
有線放送電話が開始されて間もなく、台風 15 号が昭和 34 年(1959)9 月 26 日の夕方、929.5hPa の勢力で潮岬に上陸し、紀伊半島を縦断して東海地方を襲いました。上陸時の気圧は室戸台風や枕崎台風ほどではなかったものの史上 3 番目であり暴風域も大変大きかったため、愛知県も三重県も上陸前から厳戒態勢をとっていました。にもかかわらず、東海地方を中心に犠牲者が 5,098 人、被害者数は全国で 153 万人に及ぶという大きな爪痕を残していきました。あまりに被害が甚大だったため、この台風は 9 月 30 日に気象庁により「伊勢湾台風」と命名されました。水野さんはちょうどその日に勤務だったのですが、放送会館の建物があまりの風の強さにガタガタと揺れて恐ろしかったとか。高蔵寺駅のスレート屋根も飛ばされたそうです。そして、地域の人

家が倒れたとか、人が下じきになったとか話す叫び声だそうです。交換台のランプが対応できないくらいたくさんついて困ったとも。テレビはまだ開局が始まったばかりで普通の家庭には高値の花であり、ラジオも乾電池で聞けるトランジスタラジオは出始めのころで、真空管ラジオが主流でした。また、気象観測も今のような気象衛星はあるはずもなく、レーダー運用でさえ始まっていませんでした。そこへ、広い範囲で停電となったのです。有線放送電話も、26日午後9時で50%、27日午前3時40分で60%が回線不通となったことからそのすさまじさがうかがえます。しかし、そんななかでも農協には自家発電機があったため停電でも放送を継続できるとして、この有線放送電話を止めないように頑張ったと言います。このとき、NHKラジオの台風情報を録音して放送し、消防団の招集に関する市の依頼や地域の被害状況・河川の水位等危険を知らせる情報はすべて流したとのこと。テレビやラジオでは流さない地域のピンポイントの情報であり、しかも停電が起きても聞けたという点で、この有線放送電話が大きな役割を果たしたのは間違いないでしょう。

この台風が去った後、有線放送電話の施設や設備にも大きな被害を受けていたことが分かりました。電柱の立て替えと傾斜復旧が544本、引き込み線の修理が3,016mだったと記録されています。これらの修復工事は、沖電気の福島工場からの作業員の応援を得て行われたとのこと。



高座小学校
伊勢湾台風の影響で屋根や窓、壁が破損している。



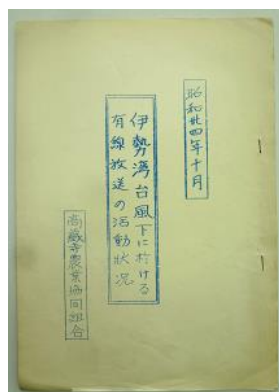
玉川劇場



出川付近の有線放送電話の電柱が傾いている様子



伊勢湾台風時についてのCBCの取材



**伊勢湾台風下における有線放送の活動状況
昭和34年10月**

当時の状況が生々しく記録されている。当地の貴重な記録でもある。

第五節 有線放送電

話の自動化と公社との相互接続

昭和 42 年(1967)10 月には、高蔵寺農協の有線放送電話も、電話交換が自動化されることになりました。利用者は電話機のダイヤルを回して直接相手にかけることができるようになり、加入者負担とはいえ会話が他の加入者に聞かれることがなくなった（秘話個別装置）のです。このときの自動交換機 A 型（ステップ・バイ・ステップ交換機）を収容するため、農協の建物を鉄筋 3 階建てにし、3 階を放送施設としました。交換機はやはり電話機と共に沖電気製としています。



新有

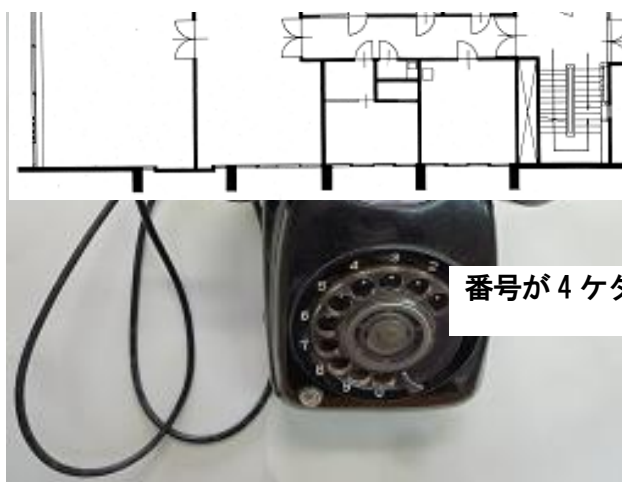
新有線放送会館 3 階



自動式の案内

有線放送の施設は、雑音等が入らないように、という配慮から 3 階になった。

有線放送電話番号簿 第 2 版



有線放送の自動電話機

沖電気製。大きさ・形とも公社電話の 600 形に似ており、ダイヤルを回して電話をかけることができた。異なる点は 3 つある。ダイヤルの左下にランプがあり、これがつくと他の番号が 4 ケタになっている・使っていることを示した。本体はつりかきボタンは緊急用。そして、左下に音量を調節するダイヤルがついている。これで本体下のスピーカーの音量を調整することができた。

昭和 42 年(1967)12 月 22 日、今度は、日本電信電話公社（電報電話局）との接続が開始されることになりました。法律改正により公社側が門戸を大きく開放することにしたからです。こちらの方は高蔵寺農協側に中継機を設置し、交換手が手動で接続を行うものでしたので、これまで交換業務に携わっていた交換手を配置転換することなくサービスを向上させることができたわけです。そして、接続できる地域としては、名古屋・小牧・瀬戸などの近隣市町村はもとより半田や岡崎、豊橋などの愛知県内の

26 地域と即時通話ができ、足助や篠島、設楽など 8 地域とも、交換台を通してではありませんが通話が可能となったのです。しかも、昭和 45 年 4 月 28 日には隣接県へも接続できるようになりました。このように、公社の電話に比べると以前には制約が多かった有線放送電話も、かなり利便性が向上したことになります。

ただ、このころから高蔵寺ニュータウンの入居が開始されることが象徴するように、春日井市は急激に人口の流入がみられ、公社の電話への加入数が増加する傾向が顕著となりました。そのため、相互接続の開始当初 1 日 600 通話あった接続数が、昭和 50 年代には 60～70 通話程度に減少していたため、昭和 52 年(1977)9 月 21 日をもって公社との接続を打ち切ることとなりました。



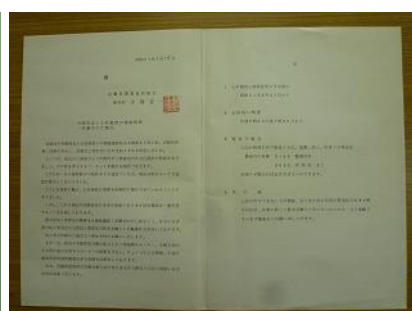
公社電話との接続の案内

1. 高蔵寺有線と接続の出る電話局名と通話料金は下記の通りであります。

局 名	通話料	局 名	通話料	局 名	通話料	局 名	通話料
足助線	34円	尾 谷	49円	知 多	40円	西 海	43円
設 楽	34円	小 牧	25円	西 海	44円	十 万 点	32円
篠 島	34円	野 下	25円	西 海	25円	篠 島	43円
一 宮	34円	新川通	34円	半 田	40円	鳴 門	37円
尾 山	25円	新 門	34円	伊 山	34円	豊 田	19円
知 摩 上 野	34円	三 河 川 原	42円	赤 古 屋	36円	細 柳	43円
大 野	40円	津 島	40円	東 海	40円	豊 田 界	17円
知 摩 横 田	40円	豊 田	40円	徳 儀	42円		
瑞 岐	40円	豊 田	40円	足 助	32円		

2. お申込みの方法について

公社電話との接続料金



公社電話との接続縮小の案内

第六節 有線放送電話の廃止

加入数も最盛期に 1,100 だったのが 650 にまで減り、加入者の増加も見込めなかったこと、携帯電話の普及やインターネットの整備が進んだこと、有線放送電話施設の老朽化と施設更新がままならない状態になったこと等々から、平成 10 年(1998)9 月 30 日にはその役割を終え、惜しまれつつも有線放送電話を廃止することになったのでした。市内で運営された他の農協の有線放送電話も現在は廃止されています。

農協の有線放送電話は、個人の加入者から個人の加入者へとかけられる公社の電話とは異なり、地域のネットワークとしての地位を築いて独特の利便性を高めていき、それが電話という機械や機能を普及させることにも大きく貢献したことが考えられます。また、地域への一斉放送という機能が活用され、例えば伊勢湾台風のような災害への対応等に大変役に立ったという歴史があることもわかりました。長野県など他県では現役で利用している地域があると聞くのはその利便性・機能性のためでしょう。

今回は、残念ながら春日井農協と春坂農協については調べるできませんでした。しかし、電話機や電話番号簿、有線放送電話に関するモノやエピソードなどはまだ掘り起こし可能なのではないかと思います。それらについては、今後の課題とし

たいと思います。



有線放送電話業務停止報告



有線放送電話の終了を告げる新聞記事

コラム

さて、最後に電話について民俗学の視点から少しだけ考察しておきたいと思います。すでに指摘されているように、電話が身近なものになるにしたがって、電話が玄関からまず台所やリビングへ、そして個室へと位置を変えました。他方、コードを長くして家族のいる場所から個室へ持ち込めるようにすることも風潮として珍しくなくなりました。このようにして電話は、家庭の奥へ奥へと移動していったのです。しかも、仕事や大事な用件をすませるための短い時間に使う道具だったのが、長い時間をかけておしゃべりをするための道具に変貌していくのです（『メディアとしての電話』）。

そして、今や電話はコードから解き放たれ、携帯電話として個人が身に着けることが当たり前の時代になってきました。電話を携帯するという形は、技術的なことだけではないかもしれないと思うと何やら不思議な感じがします。そして、それに伴って、携帯電話への依存症が問題になったり、ホラー映画などの題材になったりするなど、民俗的な新しい事象が表れています。しかも、今では単なる電話の機能だけでなく、インターネットへの接続やデータ通信を可能とする小型コンピュータと呼べるレベルに達しています。

さて、未来の電話は、どんな形で、どんな役割をはたしているのでしょうか……!?

調査に協力して頂いた方・機関・団体（敬称略・順不同）

伊藤 か津子	伊藤 勘一	伊藤 稔	稲垣 光男	安藤 和枝
小原 達良	神田 武志	黒川ふさ江	櫻井 芳昭	佐藤 一成
土屋 昭雄	長江 登	長縄 英夫	長縄 三吉	水野千恵子
村中 治彦				

伊藤十治書店 N T T 西日本名古屋支店総務部広報 東海電報旧友会尾張支部春日井地区
春日井郵便

コラム

さて、最後に電話について民俗学の視点から少しだけ考察しておきたいと思います。すでに指摘されているように、電話が身近なものになるにしたがって、電話が玄関からまず台所やリビングへ、そして個室へと位置を変えました。他方、コードを長くして家族のいる場所から個室へ持ち込めるようにすることも風潮として珍

参考文献・資料

- ・『春日井市史』 春日井市 昭和38年11月3日
- ・『春日井市史 地区誌編2』 春日井市 昭和60年3月31日
- ・『春日井市史 資料編5』 春日井市 平成5年3月31日
- ・『春日井市史 現代編』 春日井市 平成6年3月31日
- ・『東海の電信電話 ～90年のあゆみ～』 日本電信電話公社東海電気通信編 昭和37年
- ・『シンポジウム中部電力のあゆみ 第1回』 中部産業遺産研究会事務局 平成5年6月19日
- ・『高蔵寺町誌』 高蔵寺町 昭和7年4月29日
- ・『東春日井郡誌』 東春日井郡役所 大正12年
- ・『春日井十五年の歩み』 春日井市 昭和34年5月1日
- ・『とりいまつ』 柴山重治 柴山重治著作刊行会 昭和34年11月15日
- ・『電線史』 日本電線工業会 昭和34年7月31日
- ・『名古屋陸軍造兵廠 鳥居松技能者養成所と思い出』
名古屋陸軍造兵廠鳥居松技能者養成所と思い出編集委員会 昭和5年3月31日
- ・『春日井の近代史話』 春日井郷土史研究会 昭和59年
- ・『郷土誌かすがい 第17号』 春日井市教育委員会 昭和57年12月15日
- ・『愛知懸聖蹟誌 卷一』 愛知県 大正8年
- ・『写真集 春日井』 春日井写真集編集委員会編 創文出版 平成元年
- ・『メディアとしての電話』 吉見俊介・若林幹夫・水越伸 弘文堂 平成4年11月10日
- ・『おもしろ電気通信史』 三浦正悦 総合電子出版社 平成15年8月1日
- ・『明治電信電話ものがたり』 松田裕之 日本経済評論社 平成13年4月10日
- ・『高蔵寺農協六十年史』 高蔵寺農業協同組合 昭和62年3月31日
- ・HP「NTT DIGITAL MUSEUM」NTT
- ・HP「逓信総合博物館」日本郵政株式会社・NTT 東日本
- ・HP「玉川小学校 校区紹介」春日井市立玉川小学校
- ・HP「君津市役所公式ホームページ」君津市
- ・HP「発祥の地コレクション 有線放送電話発祥の地」個人
- ・HP「日本ラジオ博物館」日本ラジオ博物館事務局
- ・HP「名古屋発，気象情報」名古屋地方気象台

おわりに

展示されている電話はだれかが使ってきたものです。そして、その電話を使えるように多くの人が支えてきました。そして、たくさんの人をつないできました。そこには色々なドラマが生まれたはずです。そして、かつて様々な制約があった電話も、その便利さ故に、現在も健在どころか、益々発展して現代人にとって最も身近な道具になっています。

文化財課に見学に来る小学校3年生たちにとって、昔の電話と言えは、「600形自動卓上電話機」通称「黒電話」のことであり、珍しそうにダイヤルに指を入れて回します。現在使われているボタン式の電話や携帯電話から見れば、いわゆるアナログな感覚を抱くのでしょうか。そして、現在の現役世代から見ると、それは十分古いものであり、ノスタルジーを感じさせるものとして映るようです。

しかし、春日井の電話には、もっとさかのぼった時代がありました。そして、有線放送電話というちょっと変わった形式の電話を使っていた時代もありました。それらは、その時を知る一部の人たちの間で記憶されるにとどまり、会話にのぼることも大変少なくなっています。そのため、今回、この冊子に取り上げることができたことを大変幸運に思います。これも、本調査の聞き取りに対して、とても熱心に語ってくださった方たちのおかげと深く感謝しています。今回の調査でわかったことは、これからも春日井の歴史を掘り起こすときに、きっと役に立つことと思います。

最後になりましたが、今回の企画展展示を開催するにあたり、資料の提供・調査にご協力を賜りました関係各位の皆様に厚くお礼を申し上げます。